

9月3日の夕刻には総会が行われ、新しい会長にはハーバード大学のマードック教授（中世科学史）が選出された。国際中世哲学会の会長職がヨーロッパからアメリカに移ることについては色々議論もあり、理事会でも種々かけひきに類する動きがあったが、次回大会の開催地などの考慮もはたらいて、このような選択に落ち着いたようである。なお日本で学会を開催してもらいたいという希望をしばしば耳にしたが、その可能性は現実性からはかなり隔ったものであることを、その都度答えておいたことを付記しておきたい。（追記。昭和57年聖心女子大学で開催された中世哲学会において、中山教授の司会の下に小山、有働教授と筆者の3名で第7回国際中世哲学会に関する報告を行ったが、この記録は小山、有働両教授の了解を得て筆者がまとめたものである。）

稲垣良典

第4回国際アンセルムス学会

1982年7月11日から16日までの6日間、第4回国際アンセルムス学会が、フランス・ノルマンディー地方のル・ベック・ヘルウィンにあるベネディクト会修道院 Abbaye Notre-Dame du Bec-Hellouin において開催された。日本からは、当初、大村晴雄教授・泉治典教授が参加を予定されていたが、最終的には筆者のみ出席することになった。

会場となった修道院は、アンセルムスが33年間修道士・副院長・院長として過ごし、また、『モノロギオン』・『プロスロギオン』や「三部作」（『真理論』・『選択の自由』・『悪魔の墮落』）を著わした地である。特に今回は、「三部作」執筆後約900年に当ることを記念して、「三部作」をめぐる内容が主要テーマとして設定されていた。基本テーマは、《Etudes Anselmiennes. Les mutations socio-culturelles au tournant des XI^e-XII^e siècles.》で、国際アンセルムス委員会後援のもとに C. N. R. S. (Centre national de la Recherche scientifique) が主催するという形を取った。

開会に際して、教皇ヨハネ・パウロⅡ世から電報が寄せられたことが報告された後、C. N. R. S. 研究主幹 R. Forville によって La place de saint Anselme dans l'his-

toire socio-culturelle au tournant des X° - XI° siècles, カーン大学教授 L. Musset によって Les contacts entre l'Eglise anglo-normande et l'Eglise d'Angleterre (911-1066) と題する開会講演が行われた。

2日目より始まった研究発表は、14日と最終日を除き、2つのセクション（セクションⅠ：歴史、文献学、修道院文学；セクションⅡ：哲学、認識論、神学）が同時進行で、両セクションは更に3つずつ計6つのテーマ——Ⅰ-聖アンセルムスとその時代：ノルマン人とサクソン人。ノルマンディーとイギリスにおけるユダヤ人。十字軍。Ⅱ-学校と文化。ル・ベックの学校とその影響。Ⅲ-アングロ＝ノルマン系修道院制度とその発展。修道院財産。修道院改革。文化と修道院文学。Ⅳ-三部作：『真理論』・『選択の自由』・『悪魔の墮落』。聖書の使用。Ⅴ-三部作。真理の問題。Ⅵ-三部作：「正しさ」。倫理的・教会論的・神学的諸問題。——に分かれた。セクションⅠ. では24、セクションⅡ. では25の研究発表がプログラムに記載されていたが、筆者の出席していた後者では、そのうち20の研究発表がなされた。例えば、テーマⅣ. では、J. Chatillon : 《Saint Anselme et l'Ecriture》, R. Pouchet : 《Saint Anselme, lecteur de saint Jean》, G. Madec : 《Y a-t-il une herméneutique anselmienne ?》, テーマⅤ. では、D. P. Henry : 《Anselmian categorial Language》, R. Campbell : 《The systematic character of Anselm's Thought》, R. Herrera : 《The Proslogion argument viewed from the perspective of *De casu diaboli*》, テーマⅥ. では、M. Corbin : 《Se tenir dans la vérité. Lecture du chapitre 12° du Dialogue de saint Anselme sur la Vérité》, H. Kohlenberger : 《Libertas ecclesiae und rectitudo bei St. Anselm》, Th. Losoney : 《Will in St. Anselm : An Examination of its Biblical and Augustinian Origins》等があった。但し、Pouchet の原稿は、本人欠席のため、ル・ベック修道院副院長の Ph. Zobel 師が代読した。また、以前、中世哲学会会員であられた C. Viola 教授は、テーマⅤ. で、《Foi et vérité chez saint Anselme》という題のもとに発表された。いずれも活発な質疑応答が交されたが、時間切れのため討論半ばにして終えねばならない場合が多く、また、参加者が発表者全員のペーパーを手にしてはいえ、手渡されるのが初日の受付の時であるため、連日の充実したスケジュールの合間をぬって下見をすることはなかなか難しいとの声も聞かれた。

毎日のスケジュールは、次の如くである。8時45分から11時45分までと14時30分から17時30分までが研究発表及び討論で、各1回の休憩を含む。7時・12時・18時15分から約1時間に亙りミサ・朝夕の祈りがあり、その後食事となる。なかでも昼・夕食は、参加者全員が修道院内の一堂に会して1時間半から2時間程かけて取りそれが一週間にも及んだので、セッションの枠を超えて親しくなる機会も多く、印象的であった。夕食後には、修道院内の見学（2日目）・学会参加者を対象とした中世音楽のコンサート（3日目）・町の人々と共に楽しんだバロック音楽のコンサート（5日目）が催された。7月14日（4日目）はフランスの革命記念日であるため研究発表はなく、ルーアンの中世・現代探訪コースとセヌ渓谷の修道院めぐり（Jumieges, Saint-Wandrille, Saint-Georges de Boscherville, Saint-Ouen）コースとの二手に分かれての遠足が組まれた。最終日には、セッションⅠ、Ⅱ合同の内容総括の後、パーティーが開かれた。

学会参加者は、延べ約120名であるが、御夫妻や御家族で来られた方もあり、実際の研究者数は、これよりも少ない。また、2、3日間だけ滞在される方、御自分の発表の日だけ出席なさる方もあり、セッションⅡへの出席者は、平均して25～30名であった。

今回は、アンセルムスゆかりの修道院で学会が催されたこともあり、祈りと伴に研究発表及び討論の場を持てることは大会会場では望むべくもない、と好評であった。ル・ベックの町の方々の協力も忘れることができない。ル・ベックには、宿泊施設として、8部屋を有するホテルが一軒あるのみであったので、ホテル、ベネディクト会男子・女子修道院、個人の家と、町全体で受け入れ態勢を敷いてくれたからである。総じて、担当者のこまやかな心遣いが窺われる学会であった。

山崎裕子